

# 色彩

*Shikisai*

*Vol.13*



# ご挨拶

この度は『色彩』をご覧いただきありがとうございます。『色彩』は2004年から12年、19年、21年度に発行させていただいた写真部の部誌です。

例年に倣って部誌を作成しました。ぜひご覧ください。

今年度は同好会から部に昇格して、新たなスタートを切ることができました。そして、現在は4人の仲間を加えた総勢19人で活動をしています。

文化祭が保護者限定の来校型であるということから、多くの方に少しでも見ていただけたらと思い、部誌の配信という形を取らせていただきました。

前半には厳選写真集と題しまして、個性豊かな写真を揃えた部員全員の写真を載せています。後半は有志のメンバーが、各々の興味に基づいて写真を用いて表現した記事を書いています。

体育大会の撮影など、従来の活動をどんどんとできるようになり、新たに春季写真展の開催などの様々な活動を始めることもできました。経験したことのない活動は、部の成長に繋がったのではないのでしょうか。

私たちが掲げた今回の桜陵祭コンセプトは「個性の魅力を求めて」です。理由は二つあります。

まず、桜陵祭全体のテーマにもある「魅力、を求めた撮影です。展示や掲載写真を見ていただければわかりますが、今年はこれまでみんなが苦手としていた人を写すような写真をよく撮影しました。一つのコンテストに向けて皆で撮り合いを実践することができたのは大きな成長であると思います。そしてその中から個性を見出そうと努力していく姿勢が素晴らしいと思ったので、この言葉にしました。

もう一つは、自分の個性を見つめることです。皆さん、世間の目を気にしすぎて、自分の好きな物を見失うことがありますよね。でも、全く違う方向を見てみることで世界が広がることもあります。部員は皆、学内や通学路から自分の興味のある物を多く写真に収めています。綺麗に撮れる物、好きな物には違いがあるので、そういった点を大切にすることはとても重要であると思います。その上で、友達が撮っている写真を見て、自分にはない世界を知ることにより良い写真を撮れるように意識しています。私たちはそのようなそれぞれに違いが出る点を協調することで、その人の色が出た作品作りを目標としています。

最後になりますが、今回の文化祭で協力していただいた皆様。この場を借りて御礼を申し上げます。私は三年間部長を務めさせていただき、その中で様々な方に出会い、アドバイスをいただきました。顧問の花房先生をはじめ、外部指導員の安保さん、そして相談にに応じてくださった先生や友達にとっても感謝しています。今後、自分とともに活動してきた後輩たちが写真部の未来をしっかりと担ってってくれるのではないかと思います。

今後とも写真部をよろしく願いいたします。

2022年度写真部 部長 小前美晴

# もくじ

|       |                         |             |
|-------|-------------------------|-------------|
| 厳選写真集 | ～私たちが選んだ傑作写真～           | P.2         |
| 記事    |                         |             |
| 小説    | 銀杏                      | 江川 心悠 P.13  |
| 小説    | 一期一会                    | 西尾 蘭子 P.15  |
| 随筆    | 食堂寄ってかない？               | 上田 乙葉 P.19  |
| 随筆    | See you tomorrow ～また明日～ | 二宮 亜美 P.20  |
| 考察    | 写真史を通して考える「写真は発明か？発見か？」 | 安保 遼太郎 P.21 |
| 編集後記  |                         | P.26        |

# 厳選写真集

～私たちが選んだ傑作写真～



『昇鯉』

大江 祐希



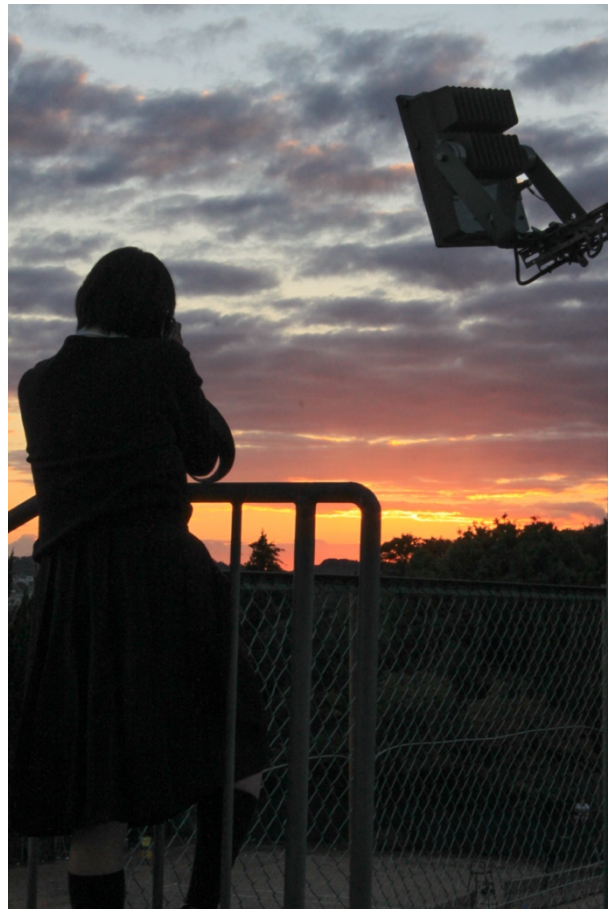
『表裏一体』

西尾 蘭子



『着地！』

寺岡 浩太郎



『夕焼けを求めて』

西海 陽香



『シャキーン!』

梶原 梨世



『夢唄』

岡田 彩楓



『幻』

川口 麻衣



『息吹き』

中辻 裕一朗



『湖畔』

吉松 春花



『出口の番人』

小前 美晴





『香』

萬年 香菜子



『待ちぼうけ』

上田 乙葉



『不死鳥』  
今中 春花



『ステップ』  
江川 心悠

『秋の空』

圓谷 美咲



『部活中』

川東 万穂子

『志す』  
高田 紗名



『未来への課題』  
二宮 亜美



『踏みしめて』

佃 麻衣



『想う』

写真部 外部指導員  
安保 遼太郎

表紙 : 小前美晴  
裏表紙 : 佃麻衣

-小説-

# 銀杏

中学2年 江川 心悠

黄色に染まりきった銀杏は、冷たい秋風に吹かれ舞っている。



土曜日のお昼間は、休日を満喫する人々の笑顔で満たされている。…まあ、私は学校帰りなのですが。土曜日は午前中授業がある私は、只今下校中だ。

…「ねえねえ!」「さきちゃん!」

名前を呼ばれ自転車を止める。

「あ、リナ。久しぶり」

「さきちゃん!久しぶりだね!」

私の言葉をリナはオウム返しする。

「リナ、その服かわいいね。おでかけ?」

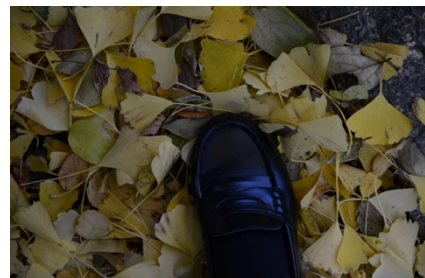
「さきちゃんこそ、制服かわいい!学校帰り?」

私はリナに学校帰りだと伝えて自転車を押す。

「私は今お買い物から帰るところ!ねえねえさきちゃん、今から小学校行かない?」

確かに、土曜日のこの時間帯は私達が通っていた小学校のグラウンドが開放されているはずだ。

私達は、母校に向かうことにした。



「リナは小6で転校してきて、よく馴染めたよね。」

「なんで？」

「私、中学に入学してから部活に入るまで、友達作りに苦労したから…」

「私も転校してきてさきちゃんと友達になるまでは特に友達なんていなかったよ？」

リナは、転校してきて最初に、席が一番遠いはずの私に話しかけた。これは未だに私の中では謎だ。

学校に着いた。自転車を止め、グラウンドへ走った。二人でブランコを漕ぎながらしゃべる。

「銀杏、きれいだねえ！」

私達が漕いでいるブランコの脇には、立派な銀杏の木が生えている。ブランコを高く漕ぐと、銀杏の木は手が届きそうなほど近くなる。

「ねえリナ、今更なんだけどなんで最初私に声かけたの？普通、最初は席が横の人とかに声かけない？」

せっかくのタイミングなので、ひとつ私の中の謎を解き明かしてみよう。

「ええ～、だって最初におはようって言ってくれたの、さきちゃんでしょ？」

「え、そうだったっけ」

まさかの新事実だ。

「もお～さきちゃんったら、頭いいのにこういうことは忘れるよね～」

リナはなんだか嬉しそうだ。

「えっとね、朝、小学校に行ったときに靴箱で会ったの、私とさきちゃん。それでみんな私のことを見てコソコソ話すだけで、声を掛けてはくれなかったから結構不安だったの。」

自己紹介してからはみんな気さくに話しかけてくれたけどね、とりなは笑った。空が朱くなってきた。もうすぐ下校のチャイムがなるだろう。

「そのときね！さきちゃんただ一人が、声をかけてくれたの！ついでにブラウスの襟も直してくれたよ」

「私…よかったよ、その時リナに声掛けて。」

うん、本当によかった。

下校のチャイムが鳴る。



私は銀杏の葉を一枚ひろった。

-小説-

# 一期一会

中学2年 西尾 蘭子

「またお前か一宮」

そろそろ本格的に寒くなってきた冬。  
目の前にいる彼は呆れた口調でこう言った。

「今年で何回目だと思ってるんだ」  
「すみません…」

働かない脳を必死に動かしても何度呼び  
出されたか思い出せない。

「次こそやってきます」  
「そうやって引き伸ばしても本当に次は無いからな」  
「はい」

きっとクラスの人からしたら当たり前前の光景。

———今日も一宮が宿題を忘れて怒られてるぞ  
———またアイツかよ  
———お前も忘れてただろ

ああ、今日はちゃんと家でやってきたのに。机に置いてきてしまっただけなの  
に。そう心の中で呟くも誰にも聴こえることはない。  
数人の視線を感じながら自分の席に着き、一つ息を吐いた。

「起立、気をつけ、礼」  
さようならー、と文化祭間近のクラスはどこか浮ついた空気で礼を言う。  
教室から人がだいぶ減った頃、重い足取りで廊下に出た。





「りこ～！バイバイ、また明日！」  
「またねー」  
「明日は英語のプリント提出だからね、気をつけて！」  
「はいはいわかってるって…」  
「出さないと居残りなんだっけ？」  
「げ、マジで？」  
「マジ」

校門までの道のりで何人かの友達に話しかけられたが、みんな電車通学なので徒歩の私は一人で帰らなければならない。

私の家まで徒歩十分。友達の前では元気に見せていたが気分がさらに下がっていくのを感じる。

日は傾き、道端の花も今日はなんだか萎れている。

今日はちゃんと提出できると思ったんだけどな…また忘れちゃった。



歩き始めてから大分経った頃、近くの茂みからガサッと音がした。

「にゃ～ん」

猫だ。

猫がいる。

猫もソーシャルディスタンスを守る時代なのだろうか。  
二メートルほど離れた場所に佇んでいるのは茶色い猫。



思わず足が止まる。野良猫というにはふくふく育っているが首輪がついていない。

一匹でいるその猫が、一人で帰っている私と重なり親近感が湧いた。

「君、誰かと一緒じゃないの？」

「にゃあ」

「そっか、私と同じだね」

どうやらこの猫は賢いらしい。会話ができています。

そして私と同じで、家に一緒に帰る友達がいないようだ。

きっと私は疲れていたのだろう。友人や家族には話せないけど、この猫になら私の悩みを相談してもいいかもしれないな、なんて思ってしまった。

辺りを見回し、誰もいないことを確認してから口を開いた。

「ねえ、会った記念に相談聞いてくれないかな？」

「にゃんっ」

「いい？ありがとうございます。実は私、宿題を忘れちゃうことが多いだ」

「にゃにゃ」

「メモは取ってるんだけどね、メモを確認するのを忘れちゃうし。」

「友達にいつも教えてもらってばっかで申し訳ないなって」

「どうしたらいいんだろう」

頬が熱い。なんだか言っていて恥ずかしくなってきた。

そろそろ日が暮れる時間。立ち話なんかしてる場合じゃない、それも猫に。

「ごめん、こんなこと言ってもわからないよね」

今日は大人しく家に帰ろう、そう思い立ち上がった時。

足元に妙な感触。私に同情してくれたのか、足に擦り寄ってきたようだ。

そのくりくりな目を輝かし、魅力的な長い尻尾を巻きつけながら、行かないでとでも言いたげだ。

少し濡れている鼻を私の手に一生懸命押しつけて、慰めてくれているのか。

「私のこと励ましてるの？」

「にゃ！」

「ありがとうございます。君は賢い猫だなあ」

「でもそろそろ本当に帰らなくちゃ」

「ねえ……いっしょに写真撮らない？」

どうして？なんて言葉が聴こえてくる。  
なんか、この瞬間を形に残しておかない  
といけない気がして。

その体を引き寄せて、シャッターを切った。



「あれっこの写真なんだっけ」

新しい手袋が欲しくなってくる季節、衣替えをしていた途中にある写真を見つけた。

少し幼い自分と猫が写っている。

「これ、1年前のやつじゃん」

懐かしい。この猫ちゃんもう会わなくなっちゃったな。今は遠いところに行ってしまったのかな、幸せだったらいいな、そんなことを考える。

それにしてもこの時期とても悩んでたことを思い出す。今はもう友達ができ、なんとか提出も間に合うようになってきた。

この猫がキッカケになったと言っても過言では無い。

私、この時から成長できてるかな。

脳裏であの子の鳴き声がした。

「きっと大丈夫！」

-随筆-

## 食堂寄ってかない？

中学2年 上田 乙葉

『食堂寄ってかない？』

誰からともなくそんな声が聞こえると、私たちはいつものように食堂に流れ込む。

放課後、昼間と違って食堂内は人があまりいない。

そんな空間が心地よい。

中二でクラスがバラバラになり、唯一みんなで集まれるひととき。

学校生活の中で帰り道は私にとって楽しい時間のひとつだ。

何をしゃべっただろう。後からあまり思い出せないほど他愛もないことをよく話している。

でもこんな時間が写真制作のアイデアに繋がっていると私は思っている。

10分ほど話すと私たちは外へ出た。最近めっきり季節は秋めいた。空気の冷たさに少し驚く。

さあ、今年の部誌は何を書こうかな

外気の寒さに身を引き締めながら、私はそんなことを考えていた。

校門を出ると、みんなそれぞれの帰路につく。

「じゃあね」

「また明日」

「バイバイ！」

じゃ、またね。帰り道。



-随筆-

## See you tomorrow ～また明日～

中学2年 二宮亜美

10月19日、20時05分。

私の帰り道には、いつも月がある。

夏でも冬でも綺麗。

中学一年生の時とは違う。

今年の6月から桜陵SSRに行っている。

大体8時まで勉強して友達と帰るルーティンだ。

さっむ 思わず声が出てしまった。それ思った！最近急に寒くなったよな！？友達も同じことを考えていたらしい。寒がりな私達、10月なのにもう凍えるくらい寒い。

夜の学校はとても神秘的！ライトだけがついて昼間より好きかも？

なんか新しい趣味欲しいんよな。なんてことを言ったら、やりたいことあるん？

とすかさず返してきた私の友達。

まあね。日によって話す内容は様々。例えば、今日あったことを話したり、時には友達が急に哲学者になったり…。毎日違って毎日面白い時間。坂を降りたら門が閉まっていて通用門からいつも出る。ロータリーにお迎えの車が来ていた。友達ともあと横断歩道を渡ったらわかれてしてしまう。それまで会話はほとんど途切れない。

バイバイ！いつもの挨拶をして、私は車に乗った。

バイバイ、また明日。



-考察-

## 写真史を通して考える「写真は発明か発見か」

2022年度写真部外部指導員(写真部 OB) 安保 遼太郎

### <I 写真前史>

まず前提としてこれを考えるにあたり、写真やカメラの成り立ちを知る必要があります。

カメラとはカメラ・オブスクラに由来するもので、ラテン語で暗い部屋を意味する語であり、暗い箱状の空間において小さな穴を通る光によって像が映し出されるという現象を利用したものです。この現象は木漏れ日として私たちも身近に観測できます。森の中だけでなく街路樹など、光はさまざまな形の葉や木々の間を通っていますが、地面に映し出された木漏れ日は真円に近いはずです。実はこれは太陽がこの現象によって地面に写し出されているから起こっているものなのです。分かりやすい例が下の部分日食時の木漏れ日の写真です。

紀元前 400 年から記録が存在するカメラ・オブスクラは、日食の観測用から次第に絵を描く道具として変化し、今日では写真を撮影する道具として進化を遂げています。つまり、現在に至るまでカメラは、暗い空間を作り出し、レンズを使い光をより効率よく集めながら任意の場所で、擬似的な自然現象を再現する道具として進化しました。記録される媒体もまた同様に自然現象の利用と言えるでしょう。写真の始まりは一般的に 1839 年に、ルイ・ジャック・マンデ・ダゲールによって考案されたダゲレオタイプと言われておりますが<sup>(1)</sup>、それも結局 1725 年に発見されたヨウ化銀の感光性（光に当たると黒くなるという性質、銀の黒化性、要は日焼けの要領です）を利用したものでした。

さて長々といかに自然現象たるかを語ってきた訳ではありますが、今度は写真が発明と考えればいかがでしょうか。現象を擬似的にどこでも作り出せるようにと発明されたカメラ・オブスクラにハロゲン化銀の感光性を組み合わせたのは紛れもなく人間で、そこには人間の営みが存在します。今日では自然現象などに人間の営みが介在する文化行為を伴うことを、一般に発明と言われております。これらを踏まえて写真は発明か発見か。ということについて考えていこうと思います。

カメラオブスクラ(左)と

部分日食時の木漏れ日(右)<sup>(2)</sup>

キャノンサイエンスラボ, 姫路科学館 HP より



## <II 文化と自然>

発明と発見とは何か、先に述べたように、現在では人間の介在するものは発明であり、しないものは自然であるということはお分かりいただけたと思います。

これらを言葉として噛み砕いていきます。まず簡単な発見から、発見ということはそこに存在していた自然現象を見つけたということであり、それはどう言い換えるにしても自然でしかありません。では発明という言葉はいかがでしょうか。発明ということは人間が介在する文化行為であることは既にわかっていることだと思います。この文化行為ということをもう少し考えてみます。人間は常に文化行為として表象行為をおこなっていると言えます。表象行為とは、自身の思っていることや考えていることを、なんらかの形に変えて相手に伝えるということです。置き換えたそれが言葉であっても、写真であっても、それ以外であっても同じことと言えます。そのことから人間の文化行為ということは全て芸術活動と言い換えることも可能という訳です。

さて、話を写真に戻します。ここで写真を発明とするのであれば、人間の表現として芸術分野の領域であると言えます。しかし、発見とするのであればこれは自然科学の領域となります。つまり発明か発見かということは写真が芸術なのかそうでないのかという問題と言い換えることができます。これが19世紀中盤から続く芸術論争へと繋がっていきます。

## <III 芸術論争>

写真は発明か発見か、つまり芸術か否かということは長年に渡ってつきまわっていきます。詩人として知られるシャルル・ボードレーは1859年に写真について次のように言及します。

「写真術に芸術を補完することをその機能のいくつかにおいて、許すならばすぐに完全に芸術に取って代わってしまうか堕落させてしまうだろう。大衆の愚昧さのお陰である。(中略)したがって、今やそれは本来の仕事に戻る時である。科学や芸術の奉仕者となること。それもでしゃばらない奉仕者。印刷術や速記術のように。それらは文学を作り出すことも補完することもしない。」<sup>(3)</sup>

つまり彼は写真のことを「絵画などの芸術を手伝うもの」として考えました。彼は写真だけでなく、絵画や文学においても写実的なものには表現がないと考えていました。写真はその写実がどこまで追求されても芸術の奉仕者の域を脱さないと考えたのです。

そして、芸術論争が長引いた理由に、写真におけるカメラは従来の芸術の道具とは異質な存在であったからということもあります。例えば絵画は自身の表現したいことによって自由に道具を持ち変えることができます。あるときは筆を、

あるときは鉛筆を、またあるときは手といった具合です。しかし、写真はカメラがないと生み出すことができません。伝統的な芸術観では、芸術が芸術としてあるためには、人間の介入が不可欠であるということが存在しました。結果として、写真が全くの機械的なプロセスの産物であれば自然の側に帰属すると考えられ、写真術は記録性のみに着目した潮流へと移り変わっていきます。

#### ＜Ⅳ ピクトリアリズムからモダニズム、そしてポストモダニズムへ＞

写真の記録性は、発明された頃から謳い文句としても利用されるほど社会的に認められていましたが、イメージそのものの芸術性はなかなか認められませんでした。その結果、写真界は、既に芸術としての価値を既に確立している絵画を模倣することで写真の芸術的価値を認めさせようという動きがロビンソンやエマーソンといった人物を中心に現れます。結果、写真家たちは絵画を模倣するように作品を作り始めます。彼らは宗教などの寓意的な主題の採用やそれに準じた画面構成を行うようになります。この流れのことをピクトリアリズムと言い、日本語では絵画主義と呼びます。ピクトリアリズムが風靡した時代は非常に長く、写真が誕生した 1839 年から実に 20 世紀初頭まで続きます。

しかし 19 世紀末期になると、形骸化してしまったピクトリアリズムと決別する新たな考え方へと社会が移行していきます。転機が訪れたのは 1902 年でした。アルフレッド・スティーグリッツらが中心となり芸術としての写真を確立するために、フォト・セセッションを組織、活動を始めました。これを写真分離派と呼びます。そしてこの活動がきっかけで写真がモダニズムへと変化していきます。19 世紀は審美性の追求であったことに対して、モダニズムでは芸術でモノの見方を変えて世界を変えていこうという動きが活発でした。そして、何よりも大事なことに、モダニズムは自身のメディアそれ自体に価値を見出していく芸術の流れであると言えることにあります。今までは絵画の模倣であった写真も、自身のメディアの理解が始まります。ここで写真はようやく自身のメディアの強みを理解しました。写真が絵画と大きく違う点は、対象がないと写真を作れないということです。そしてその強みである対象を一瞬にしてそのままに切り取るという性質からスナップ写真という表現方法を獲得しました。写真が表現として独立した瞬間と言えましょう。しかし、形骸化したピクトリアリズムからの決別をしたモダニズムもまた、形骸化の一途をたどります。それは写真でしかできない表現をとすることを追求しすぎるがあまり、体裁さえ整えれば写真は芸術となる。といった極端なものとなったからでした。1970 年頃、モダニズムから決別しポストモダニズムとなった社会は、一言で言えばなんでもありの写真となりました。なんでもありになった結果が、今の写真の飽和状態を招きます。そして、飽和したポストモダニズムからの決別がまさに今の時代なのです。



## <V デジタル環境下における写真と現在写真>

現在の写真は、ポストモダニズムの時代に居ながらデジタル環境下における写真として新たな流れへと変化しています。とりわけ、2005年以降の写真のことを現代写真と区別をして現在写真と呼びます。この頃には、デジタル的なシステムやインターネットがないと人間の生活が成り立たなくなり始め、誰もがインターネットで発信できる Web2.0 とされる時代に突入します。その新たな時代のデジタル写真は、過去のメディアム<sup>(4)</sup>(=銀塩写真)のシミュレーションと言っても過言ではありません。銀塩の写真をいかに真似るかと言った具合です。これまでの銀塩写真は、目の前のものを科学変化的に記録してきたことは言うまでもありません。しかし、銀塩の写真と大きく違うことは、それによって作られる画像は何らかの物理的対象を再現するものではないという点です。なぜなら化学反応ではなく電気信号が画像を生成しているからです。そしてデジタル画像としての写真は、デジタル信号に対する加工が巧妙に隠蔽されてしまっています。この加工により写真は必ずしも目の前の対象を写さなくなってきました。そんな写真は、もはや他の芸術までもを包含してしまうような状態にあります。誰しも一度はモナ・リザを教科書などで見たことがあると思います。そしてモナ・リザと聞けばその絵が脳内に浮かんできます。本物を見たことがなくても知っている状態にあるということです。これはつまり、ビジュアルイメージの根底に写真性が存在し、そしてその芸術に憑依してしまっている状態なのです。

この憑依性によって、もはや今日では芸術としての写真は必ずしも写真である必要がなくなってきました。極端なことを言えば、最近よく見るマスク着用を促しているイラストは、絵で表現しているものの、ビジュアルイメージの根底である写真性の憑依を利用している“写真”とも言えます。ついに写真は写真性へと形を変えて芸術の根幹をなすようになったのでした。

## <VI 写真は発明か？発見か？>

さて、「写真は発明か？発見か？」

筆者は発明であると断言します。読者の皆様も写真を撮る時は必ず何かしらシャッターを押す、シャッターを切る中で動機を感じているはずで、想い人がかわいい/かっこいい。それがモノだってそうです。あの子の持っているアクセサリーが美しい/可愛い、一緒に食べに行ったご飯が美味しそうなど。<sup>(5)</sup>シャッターの数だけ理由があります。これが人間の営みでないはずがありません。

芸術史では、なかなか芸術の立場を得られなかった写真は今日芸術の根幹を担う重要な役割を手に入れました。写真は自分達の小さな感動を、モノとして手に入れられるように発明された道具であるのではないかと筆者は考えます。

## 【注釈と追加解説】

- (1) 1820-40 年ごろはすでに写真発明の気概が社会を通して存在し、さまざまな人物がピンホールを通して映る像の定着を試みていました。写真は発明される時期に来ていて、その発明は必然だったと言えます。そのため、考え方によって写真の発明年は変化します。J.N.ニエプスはアスファルトの硬化作用を用いて 1820 年ごろに像の定着を成功させています。しかしこれは現在の写真の原理とは少し違うため今回は不適と考えました。同様に、現在のフィルム写真の基礎であるネガポジ法を発明した W.H.F.タルボット（トールボット）はダゲレオタイプの発明より以前に像の定着に成功していたとされていますが、発表年が 1841 年と一足遅れたためにこれも除きました。さらにジョン・ハーシェルが考案したサイアノタイプもまた同様の理由で除きました。今回は一般的に考えられているダゲールにより発明され、フランス学士院で発表された 1839 年 8 月 19 日を世界最初の写真術の発明年月とし、表記しました。

- (2) 部分日食における木漏れ日。本記事 1 頁目の写真は、姫路科学館より引用。ピンホールの原理により写し出された像は、太陽を上下左右反転されている。ピンホール現象により部室棟である東館の壁に写し出された太陽の像（左図）。



撮影：筆者

- (3) シャルル・ボードレー爾著『Salon de 1859』から引用して翻訳(原文:仏語)。一部の語句において現在では差別的な用語となるため、意識を記しています。

- (4) メディウムとはメディアの単数系です。メディウムの集合体のことをメディアと呼びます。

- (5) ダゲレオタイプに始まる写真の歴史において、恋人や、故人を想い肌に感じたい時に使われたことが普及の最初とされています。特に当時は形見として遺髪という文化があり、同様に、故人の肉体の代わりとして写真が利用されていたようです。これらの写真史から抜け落ちた写真のことヴァナキュラー写真(=日常の)と呼びます。(右図)



Makers unknown, Portrait of a young woman, c. 1860s  
1860 年代の若い女性のポートレートと遺髪

### 【参考文献・引用】

|  |   |      |                           |
|--|---|------|---------------------------|
| Salon de 1859                            | <a href="https://fr.wikisource.org/wiki/Salon_de_1859">https://fr.wikisource.org/wiki/Salon_de_1859</a> | 1859 | Charles-Pierre Baudelaire |
| P.H.Emarson と H.P.Robinson の写真論論争        |   | 2000 | 豊原正智 犬伏雅一                 |
| [カラー版] 世界写真史                             |   | 2004 | 飯沢耕太郎                     |
| キャノンサイエンスラボ・キッズ                          |   | 2012 | Canon Inc.                |
| Forget Me Not ; Photography and Remember |   | 2004 | Van Gogh Museum           |
| 姫路科学館 HP より 2012 年 5 月 21 日の部分日食         |   | 2012 | 姫路科学館                     |

## 編集後記

本誌を最後までご覧いただきありがとうございます。編集を担当させていただきました103回卒で写真部外部指導員の安保遼太郎と申します。今年是一部とはいえ部員全員が切望していた対面での桜陵祭の開催となり大変嬉しく思います。

さて、今回も無事に編集を終えることができホッとしているのが正直なところですよ。と言いますのも、例年、年初めから構想を練り始めている本誌ですが、訳あって直前になってしまったからです。今年、私が後輩たちの横に付いてノウハウを教え、是非引き継いでもらおうと構想していました。しかしながら夏季休暇中、私が海外取材のために不在でそれが叶わず、そもそもの制作自体を断念せざるを得ないと思っていました。結局本当に後輩たちはそれでよかったのかと迷っていた先日、中2の部員に「是非やりましょう」と言われ、その言葉でもって慌てて制作に取り掛かったのです。桜陵祭の2週間前のことでした。

兎にも角にも部員たちの積極的で有難い協力によりなんとか形にすることができました。

そして今年、部への昇格を語らずにはいられません。部への昇格は、部員数や活動日などの規定の3年以上の継続と、クラスの代表者で構成される委員会の承認を得る必要があります。名実ともに高いレベルでの活動が要求されます。部への昇格を目指そうと考えていた4年前は私が部長として指揮を取っていましたから規定と睨めっこしては悩むと言った具合でした。何の根拠もあ

りませんが、活動をすれば次第に露出も増えるだろうと、学内の認知度は心配していませんでした。ところが困ったのは部員の人数の規定の方でした。近年は”SNS 映え”の気軽さも手伝って写真ブームの再燃で写真人口は増加傾向にあります。しかし我々が普段活動で使っているようなカメラの市場は中古市場も例外なく、スマホの台頭により大幅な縮小傾向で、ことデジタルカメラに関しては出荷台数が10年で90%減少と斜陽産業化が否めません。そのような一眼レフなどが身近にないような状態で興味を持ってもらい、さらにその上で部員数の維持ができるのかが不透明で一番の心配事でした。しかしそれは杞憂に過ぎなかったと思知らされました。現役部員たちの積極的な活動により、部活紹介の時期には興味を持ってくれる新入生が、ありがたいことにたくさん見学に足を運んでくれまして、その上でたくさん後輩たちが入部してくれました。今後もきっと後輩たちが活動をつないでくれることと信じています。

さて、書きたいことはまだまだ尽きませんがこれにて失礼させていただきます。

最後になりましたが、本誌制作にあたり本当に多くの方に支えていただきました。

また、普段の活動でも多くの方のご支援、ご声援を賜りましたことをこの場をお借りし厚く御礼申し上げます。今後も写真同好会改め写真部は精力的に活動していく所存ですのでどうかご贔屓賜りますようお願い申し上げます。

2022年写真部外部指導員 安保 遼太郎

## 写真部 部活ブログ随時更新中！

写真部の活動内容など疑問がある方  
興味を持っていただいた方  
ぜひご覧ください！絶賛更新中です！

三田学園ホームページより、  
キャンパスライフ>部活ダイアリー>文化部>写真部  
を選択してください。  
写真部だけでなく、様々なクラブのブログもご覧いただけます。

### 『色彩』 Vol.13 令和4年（2022年）文化祭号

|     |                  |       |       |      |       |
|-----|------------------|-------|-------|------|-------|
| 発行  | 2022年10月29日 初版発行 |       |       |      |       |
| 配信  | 2022年10月29日      |       |       |      |       |
| 発行者 | 三田学園写真部          |       |       |      |       |
| 著者  | 上田乙葉             | 江川心悠  | 西尾蘭子  | 二宮亜美 |       |
|     | 小前美晴             | 安保遼太郎 |       |      |       |
| 写真  | 今中春花             | 圓谷美咲  | 川東万穂子 | 高田紗名 |       |
|     | 上田乙葉             | 江川心悠  | 西尾蘭子  | 二宮亜美 | 萬年香菜子 |
|     | 大江祐希             | 岡田彩楓  | 梶原梨世  | 川口麻衣 | 佃麻衣   |
|     | 寺岡浩太郎            | 中辻裕一朗 | 西海陽香  | 吉松春花 |       |
|     | 小前美晴             | 安保遼太郎 |       |      |       |
| 編集  | 安保遼太郎            |       |       |      |       |
| 製本  | 三田学園写真部          |       |       |      |       |
| 協力  | 三田学園写真部 OB 会     |       |       |      |       |

非売品 部数限定

©2022The Photo Club of SandaGakuen

本書に含まれている文章・写真の全てまたは一部を許可なく複写・複製・転写することを禁じます。

本書を無断でデータ配信、オークションへの出品等を行うことを固く禁じます。

乱丁・落丁はお取り替えいたします。それ以外の責はご容赦ください。



写 真 部